

令和4年度 東海国立大学機構 図書館プロジェクトチーム活動報告書

プロジェクトチーム名
学術情報リテラシープロジェクトチーム
サブチーム
1. 全学教育 2. 専門教育(法学・情報学・工学) 3. 質の向上と維持継承(短期・中長期) 4. 機構連携
メンバー
堀友美(主査) 石川志愛里 泉花菜 一色南穂 伊藤舞 桶本裕太 神谷知子 小屋敷瑛美 坂上征奈美 澤口由好 夏目弥生子 橋本友貴 藤井洋子 布施典子 古沢慎也 松原隆実 安福奈美
オブザーバー
萩誠一(名古屋大学附属図書館情報サービス課長)
令和4年度の主な取り組みと目標
教員と連携した学術情報リテラシー教育の推進を行う 1. 全学教育科目「基礎セミナー」での授業実施、新カリ対応の評価・改善、来年度準備 2. 法学の講習会実施と評価・改善、情報学と工学の講習会立上げ支援 3. 研修の実施、知見の共有、実施評価と全学的な支援体制の検討 4. 企画の開放、共同企画の検討、連携の可視化など
取り組みの概要
<p>各課題に取り組むためにサブチームに分かれて活動を行った。全体ミーティングは4回開催し、サブチームの進捗状況の確認・意見交換のほか、ミニ・ワークショップと文献・事例紹介による知見共有を行った。</p> <p>各サブチームの取り組みの概要は以下のとおりである。</p> <p>1. 全学教育ST</p> <p>令和4年度から開始した新カリキュラムの「基礎セミナー」(初年次必修科目)では、基本的なアカデミックスキルを教えるための教材や授業を、共通の「モジュール」として教養教育院が提供することになっており、文献検索スキルに係る動画教材を提供するとともに、動画の事前視聴を前提とした演習中心の反転授業を対面で実施した。</p> <p>◆ 対面モジュール授業の実施</p> <p>募集枠15コマのうち、応募のあった13コマで、32クラス406名(登録者425名)に対して、講師1名・補助者2名・TA1名体制で対面授業を実施した。情報サービス課の職員2名も補助者として参加した。</p> <p>◆ モジュールの評価・改善、次年度準備</p> <p>教養教育院が教員に、図書館が教員と学生に対して行ったアンケートの結果と、実</p>

施担当者による振り返りを踏まえ、内容面と運用面のそれぞれについて、問題点の洗い出しを行った。内容に関しては、対面授業とオンデマンド教材の配分を見直し、次年度に向けて教材と授業計画の改訂を行った。運用については、教養教育院の検討会で課題を共有し、授業により組み込みやすくなるよう教材提供の日程と方法等について改善を図った。来年度の講師担当予定者は、評価シートも活用しつつ、3～4月にかけてリハーサルを行い、本番に臨む。

◆ ミッション・ラリーの実施・次年度準備

基礎セミナー向けに昨年度まで行っていたTAによる図書館ツアーや、検索実習後の書架探索の代替企画として、4/8～5/19に中央図書館にて実地体験型のセルフツアーを開催した。アンケート結果やテスト参加者の意見を反映し、来年度4月開催分を準備中である。

2. 専門教育ST

◆ 法学

法学部2年を主な対象とした「法情報学I」の授業で、法情報の探し方講習会を実施した。授業で出された法令・判例の課題を解けるよう法律情報DBについて説明し、実習時間を多めに取り、課題に取り組んでもらった。難しい課題については後日図書室に質問に来るなど、熱心に取り組んでいた。NUCTに提出された課題を確認したところ、おおむね理解できており、実施後のアンケートでも10名(受講者は16名)からの回答のうち、7名が「十分理解できた」と回答していた。課題と連動しているという点で、学習効果の高い講習会になったと思われる。

来年度の講習会については、日本語文献の探し方も含めてほしいとの要望が担当教員からあり、2コマを使って実施することになった。1コマ目は、今年度同様、法令・判例の課題に沿った内容で、ある1つのテーマから関連する法令や判例を探すという、実際の情報探索の流れに近いものになるよう課題の見直しを予定している。これまでは法令や判例の探し方を教える機会がなく、課題に必要な資料は教員が準備して提供していたが、講習会の実施によって教える内容に広がり生まれ、課題の見直しにつながったものと考えられる。また、Westlawの課題について説明をもう少し詳しく聞きたかったという意見がアンケートで出ていたが、こちらはよりシンプルな課題となるよう見直す予定である。各課題の解説資料についても、授業後に学生が参照した際に理解できるものになるよう手直しを行う。2コマ目は、日本語文献の探し方と引用を主な内容として実施する。政治学または基礎法関連の文献を探すということで、政治学分野におけるテーマを調査し、他部局で使用した専門教育対応のコンテンツを参考にしつつ、準備を進めている。今年度理解できなかった項目として挙がっていた「図書・雑誌を探す」についても、文献を探す流れの中で説明することによって、より理解を深めてもらえるよう努めたい。

なお、今年度の講習会については、教員と図書館が連携して実施した事例として、教

員から、情報ネットワーク法学会で事例報告をしてはどうかという提案があった。日程の都合で不参加となったが、来年度も報告に値すると考えてもらえるよう尽力したい。

◆ 情報学

9月に複雑系科学専攻にて博士前期課程1年生と学部4年生とを対象にした講習会を実施した。途中で対象の範囲を拡大したため、博士課程後期1年生、2年生も参加し、受講人数は22名(申込人数:26名)であった。

内容は、文献調査の基本、日本語論文・英語論文の探し方の実際と戦略、正しい引用方法で構成した。教員の要望を踏まえて講習内容案を検討し、担当教員と打合せを行いながら、複雑系科学専攻の研究方法に適した調査法となるよう教材を作成した。

アンケート結果から、「具体例があって非常にわかりやすかった」「自分のテーマで実際に検索することができたので理解しやすかった」などの感想が寄せられているように、分野に特化した説明や実習が効果的であったといえる。

11月の研究科専攻長会議にて複雑系科学専攻講習会の実施報告を行い、各専攻での来年度の実施について検討を依頼した。その後の教授会では担当教員から講習会の意義、内容、感想を報告した。その結果、複雑系科学専攻は今後も継続して実施することとなり、来年度は6月を予定している。残りの5専攻については、社会情報学専攻が博士前期課程1年生必修授業の春期集中講義「社会情報学」の1コマで実施することとなり、調査法を検証中である。数理情報学専攻、心理・認知科学専攻については、次期専攻長に試行で実施してもらえないか依頼中である。情報システム学専攻、知能システム学専攻については、工学STの進捗を見つつ、おって依頼する。

◆ 工学

工学部・工学研究科では図書室主催の専門教育に特化した内容での講習会は実施していない。そこで、講習会企画立ち上げにあたってニーズ調査や研究方法についての教員インタビューをするため、以下のことを行った。

工学部・工学研究科の基本情報の確認、学生へのインタビューを経て、STメンバーと工学図書室メンバーで企画の進め方について検討し、まず工学部・工学研究科の図書部会長に説明するための資料として、リテPTの活動内容、レジュメ案、スライド案を作成した。図書部会長、副部会長に企画について説明したところ、授業の一環として行うのであれば、教務委員会から教員インタビューについて周知してもらおうとよいとの提案を受けたため、授業内で実施可能と思われる授業の調査としてシラバスを確認した。教務委員長に依頼をするための講習会企画書案、レジュメ案、スライド案と実習シートを改めて作成した。実習シート作成にあたっては実際の論文を使って検索ルートを検証したのち、工学系の論文の類型や構成、文献が必要な段階を確認し、それを踏まえた内容で検索実習を展開する流れとした。

図書部会長に教務委員長への企画紹介を依頼し、教務委員長から教務委員会で企画書について報告する旨の連絡があった。今後、教員からの申し出を受けてインタビューを行い、講習会の実施方針や内容について具体的に検討する予定である。

3. 質の向上と維持継承ST

◆ 研修の実施

昨年度実施した学術情報リテラシー教育に関する研修で、学術情報リテラシー教育を図書館が行う意義および教員との連携についての理論と動向を学んだことを踏まえ、今年度はより実践的なスキルを学ぶため、高等教育研究センターから齋藤芳子助教を講師として招き、教授法の理論や実践手法に関する研修を行った。

2022年12月15日に名古屋大学文系総合館のアクティブラーニングスタジオにて対面で研修を実施し、名古屋大学・岐阜大学から19名の図書職員が参加した。講師からの提案によりワークショップ形式で行われ、講師による「教え方」の実演の後に改善点を話し合い、講習会の実施にあたって重要なことは何かを確認したのち、自身が行う講習会を想定して具体的な目標や到達度測定についてグループディスカッションと発表を行った。参加者は、グループディスカッションや講師からの講評を通して、効果的な講習会を実施するためには到達目標の設定や受講者に関する情報収集といった事前準備が重要であることを学んだ。

アンケートでは参加者の多くから有意義であったとの回答があった。今回の内容の続きとなる授業設計や評価についての他、取り扱ってほしいテーマが参加者から複数寄せられており、今後、研修の時期や方法も含め、継続を検討したい。

◆ 知見の共有

PT内で講習会に関する知識を蓄積し、PTメンバー間の講習会経験格差を補い、それにより講習会クオリティを向上させるため、またST研修班企画の研修会「教授法を学ぶ」の予習として、PT全体会において知見共有のためのワークショップを3回実施した。

知見共有班が「シリーズ大学の教授法」の1巻「授業設計」と2巻「講義法」を元に各回のテーマを考え、図書の内容を簡潔にまとめて紹介し、PTメンバーは大阪大学ドラマFD教材「シリーズ 大学の授業を極める」の動画の視聴などの事前準備をしたうえで、意見交換や発表などのグループワークに参加した。

第1回は、「授業設計」から目標設定をテーマに、講習会の目標の立て方を確認し、目標の見直しと作成を行った。第2回は、「講義法」から話し方とテクニックをテーマとし、講師として話す際のポイントやテクニック、「注意喚起」など学生の集中力を保つ方法を確認した。第3回は、記憶定着を促進する授業の考え方、授業計画の構成や計画を立てる際のポイントを確認しながら、サンプルスライドを見て改善点を話し合った。その他、PTメンバーから、業務に役立つお勧めの文献やWeb教材などの紹介と情報共有も行った。

参考にした図書の内容は基礎的な内容が主であったが、知識を再確認することができ、PT内における知識・経験の平準化の一助になった。また知識だけでなくグループワークで実践・意見交換することでより具体的に考えることができ、実践で用いるイメージを共有できた。今後は、「シリーズ大学の教授法」の3巻「アクティブラーニング」等も扱うことも考えており、知見共有の取組を続ける予定である。

◆ 評価シートの実用化と活用

講習会のパフォーマンス面の指標となる実施編と、授業計画や教材作成の際の指標となる準備編とを分けることにした。実施編は、来年度のモジュール授業のためのリハーサルで、自己評価及び職員間での相互評価の指標として試用し、理解が難しい点等があれば見直しを行う。準備編は、今後の講習会準備の際に活用する。

このほか企画の評価として、活用体系表を用いた既存コンテンツの見直しや、他者評価の指標となるアンケート項目の雛形作成も今後行いたい。

◆ 全学的な支援体制の検討

PTメンバーそれぞれの経験を元に、各部局を支援する体制の案を作成した。実際の部局支援活動は当面保留とするが、今後各部局で立ち上げる講習会を維持できるよう、また、実施面での支援だけでなく、コンテンツの見直しなど内容の質を保つための支援もできるよう、体制を整えたい。

4. 機構連携ST

◆ 名古屋大学中央図書館の企画開放

名古屋大学中央図書館が企画・実施する講習会について、昨年度は4種類を岐阜大学の学生・教職員も参加できるよう開放したが、今年度は更に範囲を広げて25種類を開放した。広報についてはそれぞれが自大学分を担当する形で行った。対象の講習会の参加者数は名大727名、岐大339名、不明26名の計1,092名だった。

◆ 岐大・名大共同企画の実施

岐阜大学図書館主導による両大学図書館共催の「あらし読みワークショップ」をオンラインライブにて12/14に開催した。参加者数は名大8名、岐大2名であった。開催時期や広報など、改善すべき点はあるものの、アンケートでは新鮮な読み方だったという感想が複数見られ、今後もこのようなワークショップを開催してほしいという声も寄せられた。

◆ 図書館における学術情報リテラシー教育の実践体系と連携の可視化

名古屋大学では全学的な実践体系図を作成しているが、岐阜大学では未作成であった。機構図書館全体の取り組みを体系として示し、併せて連携部分を可視化するため、体系図を作成した。担当者自身が企画の位置づけを理解するとともに、教員との連携や、取り組みを紹介する際にも活用できるものと考えている。

今後の展望

今年度の活動と成果を踏まえ、来年度は以下の活動を行う予定である。

- ・ 「基礎セミナー」の授業実施、モジュールの評価・改良、更新など
- ・ 法学・情報学の講習会実施と評価・改善、工学の講習会立上げ支援
- ・ 研修の実施、知見共有、全学的な実施体制の検討
- ・ 機構としての大学間連携の推進